

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS No. 155 November 2018

研究の最前線

◆ 2018年度冬期国際シンポジウム ◆
《帝国・ブロック・連邦にそびえる言語 1918–2018》開催予告

12月13日・14日に標記の冬期国際シンポジウムが予定されています。今回のシンポジウムでは近年注目されている、比較的新しい学術分野である歴史社会言語学を切り口とし、中欧、東欧、バルカン半島の言語の動態の分析を通じ、地域の歴史を再考することを目標としています。2018年はチェコスロバキア第一共和国建国100年、ポーランド独立回復100年、セルビア人・クロアチア人・スロベニア人王国建国100年にあたります。この100年の劇的な変化は、関連地域の言語状況に大きな影響を与えました。政治的な言語の統合、分裂、形成が多々見られる100年であったと言えますが、社会状況の変化や技術の発展により、言語構造そのものにも様々な具体的な変化も観察されます。そういった変化を明らかにすることで、所与の言語の固有性とより広い文脈で見た場合の普遍性について理解を深めることができると期待されます。社会言語学は扱う内容がかなり多様で複雑なため、通時的側面も同じく多角的なものになりますが、今回は特に「言語計画」（セッション1と2）、「言語変種」（セッション3と4）、「言語変化」（セッション5）に絞って分析します。

なお、今回のシンポジウムは言語学者の報告が多く予定されていますが、言語のさまざまな局面を扱う歴史学者、社会学者、文化人類学者などの報告者も参加予定で、従来のディスクリンを超えた意見交換と共同研究発展の場になることが期待されます。こういった文脈で、言語をテーマとする研究でも知られるヨーロッパ史・文化学者 Joep Leerssen 氏、社会言語学者で、セルビア・クロアチア語に関する著名な論客である Snježana Kordić 氏のお二人に、当該シンポジウムのテーマにふさわしい基調講演をお引き受けいただきました。その他、中東欧における文字に注目し、文字使用とその歴史、社会や政治との関係について再考する特別セッションも二つ予定されています。各報告者の報告題目は現在調整中で、以下は仮題が中心です。近日中にプログラムの最終版がセンターのホームページに掲載されますので、そちらもご参照ください。[野町]

Day 1

KEYNOTE LECTURE 1

Joep Leerssen (University of Amsterdam) "The Dilemma of Language or Dialect, as Seen from the Perspective of a Historian of Central Europe"

PANEL 1: LANGUAGE ENGINEERING (BUILDING) IN CENTRAL AND EASTERN EUROPE

1. Satoshi Hashimoto (Hokkaido University) "Prague Linguistic Circle and Czech-German Relations"
2. Elena Boudovskaia (Georgetown University) "Codification of Vojvodina Rusyn: Language Ideology in Kosteljnik's Grammar of 1923"
3. Shiori Kiyosawa (SRC) "Rethinking the Graphization Process of the Belarusian Language Between Eastern and Western Belarus in the Interwar Period"

PANEL 2: RE-STANDARDIZING OR ESTABLISHING LANGUAGES AFTER COMMUNISM

1. Jan Ivar Bjørnflaten (University of Oslo) "The Making (and Un-Making?) of Soviet Standard Russian"
2. Annemarie Sorescu-Marinković (Institute for Balkan Studies SASA) and Monica Huțanu (West University of Timișoara) "Standardizing Vlach Romanian: A Recent Endeavour?"
3. Tomasz Wicherkiewicz (Adam Mickiewicz University / SRC) "The Latvian (In)Dependence and the Latgalian Language Question"

SPECIAL PRESENTATION 1: SCRIPT MATTERS 1: THE CASE OF SOUTH EASTERN EUROPE

- Aleksandra Salamurović (Friedrich-Schiller-University Jena) and Motoki Nomachi (SRC) "Script Revitalization? Reemergence of Old Scripts among South Slavs"

Day 2

KEYNOTE LECTURE 2

- Snježana Kordić (Independent Scholar) "Ideology against Language: The Current Situation in South Slavic States"

PANEL 3: "NEWSPEAK" ISSUES IN COMMUNISM AND THEIR LEGACY TODAY

1. Romuald Huszcza (University of Warsaw) "TBA"
2. Keiko Mitani (The University of Tokyo) "Legalese as Newspeak: Legal Language Questions in the History of Serbo-Croatian-Montenegrin"
3. Neil Bermel (The University of Sheffield) "Democratizing Linguistic Forms: Language Regulation and Diachronic Shifts in Czech"

PANEL 4: CYBERSPACE'S ROLE IN LANGUAGE VARIATION

1. Eleonora Yovkova-Shii (Toyama University) "Language Change and Variation in Bulgarian: From a Sociolinguistic and Historical Perspective"
2. Vera Zvereva (University of Jyväskylä) "Attitudes to Linguistic Accuracy among Russian-Speaking Social Media Users"
3. Tomasz Kamusella (University of St Andrews) "Between Suppression in Poland and Flourishing on the Web"

PANEL 5: LANGUAGE CONTACT AND LINGUISTIC CHANGE

1. Michael Moser (University of Vienna) "Urban Soviet Ukrainian of the 1920s"
2. Motoki Nomachi (SRC) "Grammatical Change in Kashubian as a Reflection of Sociolinguistic Change"

SPECIAL PRESENTATION 2: SCRIPT MATTERS 2: THE CASE OF CENTRAL-EASTERN EUROPE

- Tomasz Wicherkiewicz (Adam Mickiewicz University / SRC) "Letters of Freedom and Captivity. Scriptal Planning and Language Ideologies in Central-Eastern Europe in the Long Twentieth Century"

◆ 高橋沙奈美助教が地域研究コンソーシアム賞登竜賞を受賞 ◆

センターの高橋沙奈美助教が第8回(2018年度)地域研究コンソーシアム賞(JCAS賞)登竜賞を受賞しました。地域や国境、そして学問領域などの既存の枠を越える研究成果を対象とするJCAS賞のうち、登竜賞は研究経歴の比較的短い方を対象とし、作品の完成度に加えて斬新な指向性や豊かなアイデアを重視して評価されます。受賞対象となった著書『ソヴィエト・ロシアの聖なる景観：社会主義体制下の宗教文化財、ツーリズム、ナショナリズム』(北海道大学出版会、2018年)は、ソ連地域研究のみならず、近代社会における宗教の変容や、社会主義体制下の公共性を論じるグローバルな比較研究にも重要な貢献をなしている、発展的な論点があるものとして登竜賞に相応しいと評価されました。11月2日に大阪大学で開かれたJCAS年次集会内での授賞式の前後にも多くの研究者から声をかけられていた高橋助教、今後の益々のご活躍が期待されます。[安達]



授賞式に出席したセンターの3名：高橋助教を中心に

◆ 人間文化研究機構基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジア地域研究」主催 ◆
国際シンポジウム

「北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道」

2018年9月22～23日に、国立民族学博物館(吹田市)で人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」(2016年度～2021年度)に参画する6拠点による合同国際シンポジウムが開催されました。

北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター拠点は、初日の第二セッションで“Rethinking the Northeast Asian Community”(北東アジア共同体論の再考)というパネルを組織しました。パネリストは全員拠点メンバーで、堀江典生(富山大)が司会を務め、ディビッド・ウルフ(北大)、田畑伸一郎(北大)、泉川泰博(中央大)の3名が歴史、経済、国際関係論の見地から報告をおこない、拠点リーダーの岩下明裕(北大)がコメントをしました。

ウルフ報告“*In Search of Northeast Asia's Least Common Denominator*”は、Lucien Pyeが*Asian Power and Politics*(1985)のなかで提唱した「地域の政治文化」という概念に基づき、地域政治の最小共通分母としての、北東アジアの政治的特徴と実践について検討するものでした。とくに、(1) 統治体制：民主化以前のこの地域の政治主体は王朝や帝国であり、現在も安倍晋三、習近平、金正恩の3人の指導者は統治者の家系に生まれ、統治にその影響がみられる、(2) 汚職：ロシアを含む北東アジア諸国の共通点としての汚職のメカニズム、(3) 人質(hostage-taking)：徳川幕府の参勤交代制、北朝鮮による日本人拉致事件のように、「人質」を政治的手段として用いる文化、の3点を議論しました。

田畑報告“*Advancing Economic Integration in Northeast Asia over the Past Three Decades*”は、(1) 過去30年の期間に日本、中国、韓国の間でどの程度経済統合が進展したのか、(2) この期間に日中韓とロシアの経済関係を前進させた要因は何か、の2点について貿易統計

みづか
北東アジアにおける地域構造の変容
越境から考察する共生への道

NIHU Area Studies Project for Northeast Asia
Regional Structure and Its Change in Northeast Asia:
In Search of the Way to Coexist from the Point of View of Transborderism

Date: September 22-23, 2018
Venue: Conference Room 4, National Museum of Ethnology, Osaka

2018年9月22日(土)・23日(日)
国立民族学博物館 第4会議室
定員: 各セッション20名(定員超過の場合は抽選)
参加費: 無料

September 22
September 23

国立民族学博物館
National Museum of Ethnology

データを分析するものでした。結論では前者について、日中韓の経済統合は2000年代半ばまで急速に進み、とくに産業内貿易の統合が顕著であったが、それ以降経済統合は少しずつ停滞しており、これらの推移の要因として中国の役割を指摘しました。(2) について、ロシアと北東アジア諸国の経済統合は1980年代から現在までの間に大きな変化を遂げた、日中韓の間の貿易と比較するとロシアとの貿易ははるかに小さい、しかし、ロシアは石油・ガスの主要な供給国として、また自動車および電気機器の輸入国として、北東アジアに参入したことを認識すべきであると指摘しました。

泉川報告“The Trump Shock and Its Impacts on Regional Integration in Northeast Asia”は、北東アジア地域における米

国の役割について、(1) トランプ政権が東アジアの地域主義に及ぼす影響、(2) 歴史的観点から見るトランプ政権の影響、(3) 北東アジア地域の機能の可能性、の3点を議論しました。経済的相互依存は地域の制度化にとって重要な要素であるが、それ自体のなかで地域の制度化が進むわけではなく、米国のリーダーシップは重要な要素だと述べました。また、現在の価値や規範の共有を欠いたままの東アジア地域主義を19世紀の「ヨーロッパ協調 (Concert of Europe)」に例えて説明しました。

司会およびコメンテータからは、北東アジアというサブリージョンを超えて、グローバル・アクターとなった中国の影響をどのように理解するのか、域内の相互学習の過程で、戦略的パートナーシップやメディア・コントロールなどより多くの政治文化の共通点が生まれている。これらは「ユーラシア」の共通項でもあり、北東アジアとどう区別するのか、トランプ政権下での朝鮮半島情勢の変化や米中貿易紛争により、韓国や日本はより行動の選択肢が増え、新たに「北東アジア」域内の相互依存が深化しているのではないかと、この方向性をユーラシアのなかでどう定義していくべきか、などの質問が出されました。

会議全体の詳細は、後日 NIHU Magazine として人間文化研究機構のウェブサイトで配信される予定です。[加藤]

◆ 2018 年度特任教員（外国人）決定・着任 ◆

ヴィヘルキェヴィッチ、トマシュ（Wicherkiewicz, Tomasz）

所属・現職：アダム・ミツキェヴィッチ・ポズナニ大学近代言語学・文学学部 教授

研究テーマ：社会言語学、言語接触および言語政策から分析する中・東欧の文字、書記体系および正書法

滞在期間：2018 年 7 月 17 日～2019 年 2 月 15 日

受入教員：野町

ウォードロン、ピーター（Waldron, Peter）

所属・現職：イースト・アングリア大学 近代史学教授

研究テーマ：ロシアにとっての第一次世界大戦：公共圏の拡大

滞在期間：2018 年 9 月 18 日～11 月 19 日

受入教員：長縄

アビケエヴァ、グルナラ（Abikeyeva, Gulnara）

所属・現職：カザフ高等建築アカデミー 教授

研究テーマ：中央アジアにおける「ソヴィエト的人間」の社会的モデル化：文学と映画を通して

滞在期間：2018 年 10 月 1 日～2019 年 2 月 1 日

受入教員：宇山

[編集部]

◆ Charles Che-Jen Wang（汪哲仁）氏の滞在 ◆

台湾の研究者の Charles Che-Jen Wang（汪哲仁）氏がセンターに 10 月始めから 11 月始めまで 1 ヶ月余り滞在されました。氏は台湾で淡江大学を卒業された後、マンチェスター大学やロシア科学アカデミー経済研究所などでも教育を受けられ、台湾やモスクワなどで教職に就かれておりました。夫人のお仕事の関係でロシア滞りが長く、ロシアの政治経済に関する研究をおこなっておられましたが、今回は日本台湾交流協会の助成金を得て、日露関係に関する研究をおこなうためにセンターに来られました。センター滞在中には北海道とロシアとの交流・ビジネスをおこなっている関係者と面談したり、根室を訪問したりするなど、精力的に活動されたようです。

10 月 29 日にはセンターで開かれた国際ワークショップ“Dynamics of Contemporary Eastern Eurasia”において、“Japan-Russia Territorial Dispute under Systemic Constraints”と題する報告をされました。[田畑]

◆ 研究会活動 ◆

ニュース 154 号以降、センターでおこなわれた諸研究会活動は以下の通りです。[大須賀]

- 8 月 29 日 徳永昌弘（関西大）『『ロシア語圏市場』における外国直接投資に関する研究：予備的考察』（客員研究員セミナー）
- 8 月 30 日 Victor Larin（極東諸民族歴史・考古・民族学研究所、ロシア）“The Present and Potential Connections and Tradeoffs Between Arctic and Far East Policy/Investment”（NIHU セミナー）
- 9 月 4 日 澤直哉（早稲田大）「冥府降下と新生：O. マンデリシターム『ラマルク』をめぐる」（中村・鈴川基金奨励研究員セミナー）
- 9 月 25 日 Bakhtiyor Islamov（プレハーノフ記念ロシア経済大、ウズベキスタン）“Breakthrough in Relations of Uzbekistan with Other Neighbouring Central Asian States”（センター特別セミナー）

- 9月28日 第27回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 宇山智彦(センター)「大国間競争と権威主義に席卷されるユーラシア：日本ができることは何か」
- 10月9日 Maria Shagina(日本学術振興会特別研究員PD/立命館大学)“Japan’s Sanctions Against Russia: Asian and European Perspectives Compared”(NIHUセミナー)
- 10月13日 Добро пожаловать в SRC! 上智大学村田ゼミ合宿@スラブ・ユーラシア研究センター 斎藤慶子(センター)「現代日本におけるプティパのバレエ作品の受容状況：チャイコフスキー記念東京バレエ団を例に」；清沢紫織(日本学術振興会特別研究員)「村上春樹『イエスタデイ』のロシア語翻訳における擬似トラジャンカの使用をめぐって」；大武由紀子(北大文学研究科専門研究員)「アヴァンギャルド芸術家グスタフ・クルーツィス：アジテーション芸術を求めて：生産主義イデオロギーの具象」；鶴見百英「ロシア動物昔話に見られる異教時代の境界線」；柴十紀子「ポリフォニー小説」；明珍奨真「M. БулгаковとH. Евреиновの戯曲における劇中劇の構造とその特徴」；新田雄士「バクーニン主義の現在についての若干の考察」；蒲谷勇人「ソロヴィヨフ解説」；安田有希「ブローク」；河野航貴「2つの構成主義とドイツ・バウハウスとの比較」；細谷日乃花「ロトチェンコの芸術手法」；有重満里奈「プロコフィエフの音楽におけるスケルツォとグロテスク」
- 10月17日 中央アジア映画上映会 Central Asian Cinema with Gulnara Abikeyeva 映画：『父への電話』(2017年/カザフスタン/約90分) 映画監督：セリック・アプリモフ
- 10月18日 SRC/IRS 共催セミナー New and Old Frontiers in Slavic Linguistics Marc. L. Greenberg(カンザス大、米国)“Peripheral Phenomena in South Slavic”
- 10月22日 Peter Waldron(センター)“Russia’s First World War: Power and Public Organisations”(センター特別講義)
- 10月26日 須川忠輝(大阪大・院)「体制転換後の中央地方関係と政治：1990年代のチェコ・スロヴァキアを事例に」(中村・鈴川基金奨励研究員セミナー)
- 10月29日 国際ワークショップ“Dynamics of Contemporary Eastern Eurasia” Charles Che-Jen Wang(台湾)“Japan-Russia Territorial Dispute Under Systemic Constraints”；Erdenebat Bataa and Soyolmaa Batbekh(モンゴル国立大)“Research (In)capacity and Brain-drain of Post-Communist Economists: Field Experiment from Mongolia”；Tamara Litvinenko(地理研究所、ロシア/同志社大)“Population Dynamics and Transformation of Human Settlements in Russia’s Eastern Regions and Their Relation to Ethnicity and Natural Resource Use”

人事の動き

◆ 助教の就任 ◆

本年10月1日をもって、斎藤慶子さんがセンター助教に就任されました(プロジェクト室)。斎藤さんは早稲田大学大学院文学研究科において日露の文化交流、特にバレエ交流史を研究され、博士課程修了後はセンターの学術研究員を務めておられました。今回、境界研究ユニットの助教であったジョナサン・ブル氏の転出に伴い、後任として採用されました。[仙石]

ジョナサン・ブルさんはメディア・コミュニケーション研究院に異動されました。[事務係]

◆ 学術研究員紹介 ◆

アセリ・ビタバロヴァ 2018年10月に着任(プロジェクト室)

研究テーマ：中央アジア諸国・中国間関係における相互認識

斎藤慶子さん(前学術研究員)は上述のとおり、助教に就任されました。[事務係]

◆ 事務職員 ◆

事務補助員 10月1日付け

金山 みどり(採用)

[事務係]

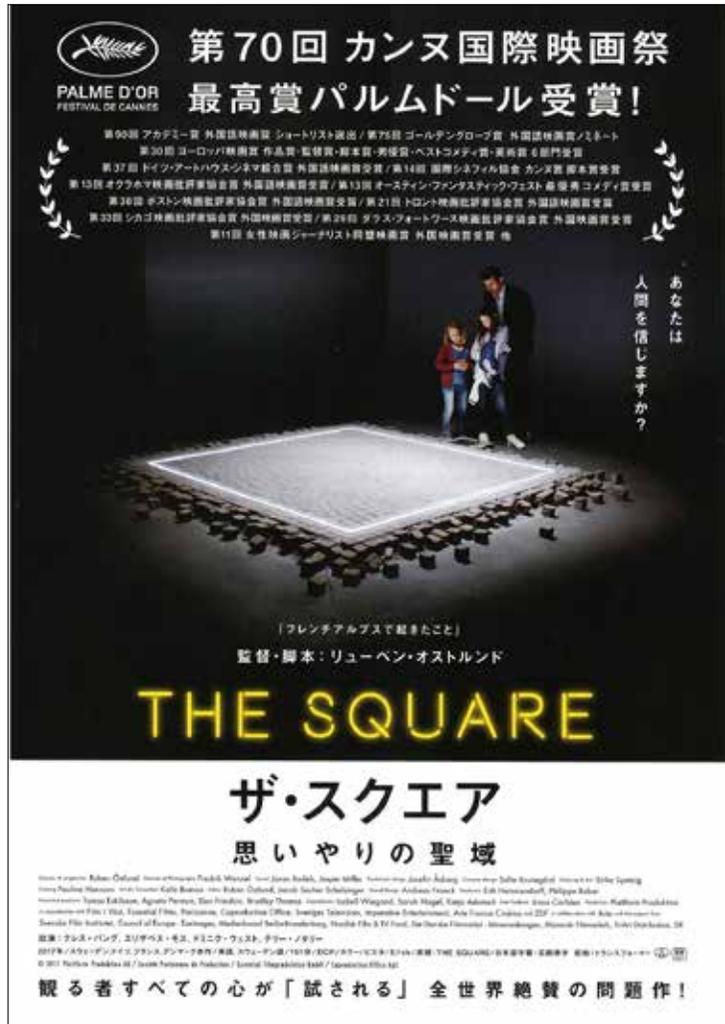
映画にみる人間の輪郭

後藤正憲（センター）

槌と鎌のトレードマークが今も残る航空会社は、機内で提供する映画や音楽のプログラムが豊富だ。その機内で最近観た映画の話から始めさせていただきたい。リュウベン・オストロンド監督の *The Square* (2017)、邦題は「ザ・スクエア 思いやりの聖域」。今年、日本でも映画館で公開されていたが、上映期間中に観に行けなかったのが、ここぞとばかりに選んでみた。

主人公のクリスティアンは、ストックホルムのとある美術館につとめるモダン・アートのキュレーター。その職業が想像させるように、おしゃれでスタイリッシュなダンディーである。彼が次回の展示作品として起用するのは、地面を四畳半ほどの大きさの正方形に区切っただけの作品だった。「信頼と思いやりの聖域」とされるその四角のなかでは、すべての人が平等になるという註釈がつけられる。あえて矛盾のない状態を空間的に浮かび上がらせることで、社会に遍在する様々な矛盾を思い起こそうというねらいがあるようだ。ある朝、クリスティアンは通勤途中に、財布と携帯電話をすられる。彼が盗まれたものを取り返そうと悪戦苦闘したり、新しい展示の広告を企画したりする中で、それまで思い描いていた世界の輪郭が壊れていく。

なんといっても圧巻は、著名人やパトロンを招いて盛大に開かれる夕食会の挿話的なシーンだ。美術館では、猿のまねをする人間のパフォーマンスがビデオ展示されていたが、夕食会の余興として賓客たちに猿のまねを披露するべく、そのパフォーマンスが会場に呼ばれる。華やかな衣装に身を包む紳士淑女たちは、初めは半裸で会場を歩き回るパフォーマンスのユー



日本公開時のチラシ

モラスな動作に興じる。しかし、その行動が度を越したものであると分かるにつれて、和やかだった雰囲気次第に硬直したものに変わっていく。目の前に繰り広げられるのは、もはや猿のまねをする人間のパフォーマンスではなく、人間の姿をした猿が挑発するかのよう乱暴狼藉を働いている光景なのだ（このパフォーマー、いや、この猿を、2001年から映画「猿の惑星」シリーズに俳優の演技指導やスタント役として関わるテリー・ノタリーが怪演している）。

夕食会のシーンが象徴的に示しているのは、上品で洗練された人間社会の輪郭が暴力的に破壊される光景を目にすることによって、私たちが覚える居心地の悪さだ。美と正義に基づく人間の生き方に、あえて確かな輪郭を引くことによって、かえってそのほころびが露わになるという皮肉。普段生活するなかでは、あえて意識することのないテーマであるだけに、映画から受ける衝撃は大きかった。



サハでの公開に用意されたチラシ

それから半月後、東シベリアのヤクーツクにいた私は、幸運にも観たかった映画の公開日に居合わせることができた。今年4月にモスクワ国際映画祭で最優秀作品賞を受賞した作品で、サハ・フィルム制作による「トヨン・クイル」Тойон Кыылが、本国サハでいち早く公開されたのだ。

タイトルはサハ語で鷲を意味する。直訳すれば「気高い獣」となるだろうか。トヨンの呼称は、族長や主人、地位や身分の高い人など、人間や神に対しても一般的に用いられる（ちなみに、映画のロシア語タイトルはЦарь птица、英語はThe Lord Eagle）。サハでは昔から、鷲は神の使いや守護霊とみなされ、崇敬と畏怖の対象とされてきた。サハ人の鷲に対する特有の見方については、しばしば古い民族誌にも記されている（例えば В.Л. Серошевский, Якуты. 1993 [1896], С. 454, 633; В.М. Ионов, Орел по

воззрениям якутов. 1913)。エドゥアルド・ノヴィコフ監督は、こうした資料をよく読みこんだ上で制作に臨んでいる。映画は技術面でも優れている。カメラは鷺の生き生きとした動きを躍動感あふれる映像に捉えているし、暖炉の火から起きた火の粉が空中で踊りながら文字を形作って、タイトルやクレジットが浮かび上がる仕組みなどは、とても印象的だ。だが、本国でもあまり知られていない文学作品をもとにして作られ、サハ人の俳優がサハ語で演じたマイナーな映画でありながら、本作品が国際的に高い評価を受けているのは、その背後に普遍的なテーマが横たわっているからだと思う。

映画は、1930年代のヤクーチアの平原で、つつましく暮らす老夫婦をめぐって展開される。ある朝突然、老夫婦のもとに鷺が飛来し、家の前に生えるカラマツの老木に居つく。老夫婦は困惑し、追い払おうとするが、鷺はそこから離れようとしなない。弱り果てた老人がシャーマンに相談したところ、鷺は昔、老人に巣を壊されたことを恨んで飛来したのであって、許しを請うには飼っている牛を殺して、その肉を差し出さなければならないという。老夫婦がそのお告げを守って肉を与えたところ、鷺はそれをうまそうについばむ。鷺への供食は続き、クリスマスの夜には家の中にまで入ってきて、堂々と上座におさまる。

うやうやしくも、どこかぎこちなく鷺をもてなす夫婦だったが、ある時老人が病の床に臥していた時に、鷺が高価な毛皮のとれるキツネやテンを捕えて、庭先に運んできたのを見て驚く。冬じゅう肉を提供し続けたことへのお礼と受け止めた二人は、以前事故で亡くした一人息子の姿とも重なり、次第に鷺に対して親愛の情を抱くようになる。やがて老人の体は回復し、外に働きに出かけていた時に、二人のコムソモールの若者が夫婦の家を訪ねてくる。新しい党の方針を知らせに来た彼らは、老婆に対して、家畜を住居から別にして家畜小屋で飼うべしという綱領を読み上げる。はつらつとした若者たちが去り、しばらく後に一発の銃声が響く。カラマツの木にとまっている鷺に気づいた若者が、無惨にも撃ち殺したのだった。

1930年代のヤクーチアで行われていた変革は、人と動物の輪郭を暴力的に描き直す作業だったと言えるのではないだろうか。それ以前のサハでは、寒い冬の間、牛などの家畜と人間が、壁一枚隔てて同じ建物で暮らしていた。気温が零下50度まで下がる厳寒の地では、理にかなったやり方だった。しかし、それが非衛生的だという名目で、牛馬は人間から切り離され、さらに集団化の名のもとに一か所に集めて飼育されるようになる。同じ頃、いにしえより神霊や動物など野性的な存在と近い関係を保っていたシャーマンは、情け容赦なく迫害された。コムソモールによる鷺の殺害は、「文明的な」人間から動物を排除したところに新たな輪郭を引こうとした、当時の国家的意志を象徴的に再現している。

人は自分の姿を鏡や写真に写して見るのでないかぎり、自分の身体の輪郭を知ることにはできない。それと同じように、自分が人間であることに疑いを持つ人はほとんどいないが、人間の輪郭についてはほとんど意識することなく、日常を暮らしている。あえてそれについて考えることに意義があるとはいえ、むりやり明確な線を引こうとすると、その横から必ず破れ目が生じる。上で挙げた映画は、人間の輪郭がもっと複雑で流動的なものであることを教えている。それは、どこか外側にはみ出していたり、引っ込んでいたり、外部と溶け合っていたりするのかもしれない。

UArctic Congress 2018 に参加して

高橋美野梨（センター）



落ち着いた雰囲気のアウルス市

私は、2018年9月3日から7日にかけて、フィンランド・オウル／ヘルシンキにて開催された第2回・北極圏大学会議（UArctic Congress 2018）に参加した。北極圏大学（University of the Arctic）は、北極圏の持続的な発展を目的とする教育研究機関ネットワークで、200を超えるメンバーシップによって運営され、北極を専門とする研究者のみならず、先住民族（団体）、政策決定者、一般企業関係者など広い分野からの参加者が集まる北極研究最大級のコンソーシアムである（日本では北海道大学が唯一メンバーシップを持っている）。会議の共通テーマには、2016年から2030年までの国際目標「持続可能な開発のための2030アジェンダ」や、気候変動抑制に関する多国間枠組み「パリ協定」などをふまえつつ、北極の自然環境や社会の脆弱性、ローカル／伝統的な知識の在り方、長期的な視野に立った人材育成、観光などを含む北極の新しい市場開発が挙げられている。これらは、ロシア・サンクトペテルブルクにて開催された前回（第1回／2016年）大会から続く課題でもあった。

第2回目となる今回の会議は、前回大会と同様に質量ともにスケールの大きなものになった。オンラインで確認することができる Science Section に限ってみても、その数は57にのぼる。これ以外にも Meeting Section として、Council of UArctic, Rectors Roundtable, Thematic Networks and Institute Leaders Meeting、さらには Plenary Session や Side Event として APECS-UArctic Science Communication Workshop が開催されている。私自身は、全日程の参加はかなわなかったが、いくつかの Plenary Session の聴講と、Science Section のセッション“International Conservation Law and Local Communities. Can Local Interests Be Adequately integrated?”で発表する機会を得ることができた。このセッションでは、地域の利益（local interest）をいかに適切に国際レベルの枠組みに統合していくことができるか、あるいは国家による条約の調印・批准をもって成立する国際社会における意思決定に、いかに適切に統合していけるかという問いが立てられている。これは、国際社会が抱える課題に対して、国家が十分な解決能力を持たないことが明らかになってきた昨今、ある決定の「効用」を高め、持続的なガバナンスの仕組みを維持するために、北極圏に住む先住民族の利益をいかに適切に反映させていけるかという観点から、さまざまな場所で議論の俎上に載せられているものである。

例えば、会議3日目（9月5日）に組織された「常時参加者パネル：北極圏における教育と人材養成（Permanent Participant Panel: Education and Training in the Arctic）」も、地域の利益と国際動向との調和と背反について、北極圏における教育実践の中から考えようとするものであり、上記セッションとの類縁性を持つものであった。ここでいう「常時参加者」とは、1996年に設立されたハイレベル政府間協議体である北極評議会（AC: Arctic Council）における6つの先住民族団体を指しており、北極政治の作動に影響を与え、AC存立の正当性の根拠となる主体であると同時に、国家だけでなくさまざまな主体が利害関係を共有する



UArctic Congress 2018 オープニングセレモニー

北極の国際政治のあり様を示す重要な存在にもなっている。

このパネルでは、北極圏先住民族を UArctic の活動に合同 (incorporate) させることを目的に、UArctic が北極圏先住民族の教育と人材養成のメカニズムをいかに構築し、運用し、促進させていくことができるかについて議論が展開された。特に近年では、北極圏における教育の必要性は各所で議論になっており、例えば北極圏監視評価プログラム作業部会 (AMAP: Arctic Monitoring and Assessment Programme) が発行する報告書『変動する北極への適応行動 (ACA: Adaptation Actions for a Changing Arctic)』においても、カナダ北極圏における高等教育の不在や、初等教育、中等教育の卒業率がカナダ最低水準であることなどが指摘されるなど、北極圏先住民族の初等・中等・中等後教育の在り方が課題として取り上げられている。本パネルは、北極圏全体が抱える教育問題に対する UArctic の対応の一つでもあった。

6つの先住民族団体を代表する7名の登壇者による語りは、各自の個人的な経験に基づく「主観的な色彩」を帯びるものであった。しかし、むしろそうした個々人の経験に裏打ちされた語りの諸相は、北極圏先住民族に対する静的なイメージに回収されない広がりを持つものとして傾聴に値した。1時間半という限られた時間の中で、登壇者それぞれが辿ってきた人生に引き付けながら、北極圏における中心と周縁、支配と被支配、(ポスト)植民地主義、科学と在来知、人権や先住権などが語られたことは、ライフストーリーとしてのオーラルヒストリーが当該地域の「歴史」を理解する上で、また「歴史」を捉え直していく上で意味のあることだと再確認する契機にもなった。それは、何よりも、先住民族が北極圏の「歴史」と争点を形作ってきた重要な主体の一つと言えるからであろう。例えば、植民地主義などに代表される北極圏の「近代史」は、国家と先住民族との支配と従属の歴史と言い換えることもできる。近年では、国家が先住民族の権利を認める「承認」を超えて、先住民族の世界観を規定する人間=環境関係の一元論的世界の「再生」、そして「和解」と呼ばれる国家と先住民族とが対等な関係を築くための協定締結などの動きが見られている。本パネルが、まさにこうした国際的な動向を受けて設置されたことは、容易に見て取ることができた。

他方で、少し気になることもあった。それは、先住民族(社会)を国家との対比の中に位置付け、周縁性と中心性、被支配性と支配性、在来知と科学といった二分法的な関係性の中に対置することへの違和感のようなものである。その違和感は、UArctic のような場で語られる先住民族の過去・現在と、実際にフィールドワークに出た時に確認される「事実」や受ける印象との齟齬(ズレ)に起因している。例えば、UArctic のような場で北極圏先住民族(社会)

が語られる時、そこで問われてきたのは1. 環境や動物と密接な係わりを持ち続けてきた（と同時に、それに巻き込まれる存在でもあった）ことをふまえ、人間と自然環境との互酬的な世界観を国際レベルでの合意にどのように反映させていけるか（私が参加したセッションのテーマにもなった）、2. こうした世界観と、人間＝環境の再生サイクルを成り立たせるための作法やタブー、儀礼や祭りとを、生存のための法則として機能する世界観という文脈をふまえつついかに理解するか、3. これらは自然環境を人間との関係から切り離して対象化する科学とどう接続するか、あるいは、在来知とアカデミズムとの調和はいかにして果たされるかといったものであった。

その一方で、私のグリーンランド中西部での（とりわけ捕鯨を対象にした）フィールドワークからは、人間＝環境の再生サイクルを成り立たせる要件となるはずの作法・タブー・儀礼・祭りなどが、いっさい確認できなかった。グリーンランドでは、狩猟文化を担うチューレイヌイットの人たちによって、少なくとも西暦1200年頃からクジラが捕獲されており、捕鯨に係わる儀礼や祭りは、人類学者であるリチャード・コーフィールド（Richard A. Caulfield）などによっても暗黙知として機能してきた。特に、彼らの調査地であるケカトースアック、キツイスアスイット、アーシアートなどのディスコ湾周辺域（グリーンランド中西部）は、約4400年前の遺跡から鯨骨が出土するなどクジラ利用の歴史が長く、18世紀以降は宗主国デンマークによる植民地捕鯨の中心地であると同時に、オランダも捕鯨基地を置き、鯨油採取の世界的拠点として位置付けられてきた地域でもあり、儀礼などの結び付きは自明のこととして認識されてきた。にもかかわらず、現役・元ハンターから発せられるのは、少なくとも過去100年にわたって儀礼が存在しなかったこと（記憶にないこと）であった。このことと関連付けて、雪氷学者にして現地との強いコネクションを持つ場澄人と冒険家の山崎哲秀による、グリーンランド北西部における冬期のカラスガレイの乱獲の事例も（的場・山崎2018）、「イヌイットを含めて、採集狩猟民は必要以上の獲物をとらない、捕獲した獲物を可能な限り利用する、自然と調和した生活を営み、過剰な消費をしない」（スチュアート1996: 125）という先住民族の像にははまらない具体例として特筆に値するものであった。

誤解なきよう付言すれば、こうした局所的な「事実」のみを持ち出して、先住民族の在来知や世界観、それらに規定された儀礼などが忘却されているとか、表舞台で語られる先住民族にまつわる言説が全てウソだなどと言いたいわけではないし、そう言い切る知識も経験も私にはない。あくまでも、自分の頭のなかを整理するために、上記の「違和感」のようなものをどう咀嚼していけばよいかについて、フィールドワークで得た経験との対比のなかで思うところがあったという程度のことである。

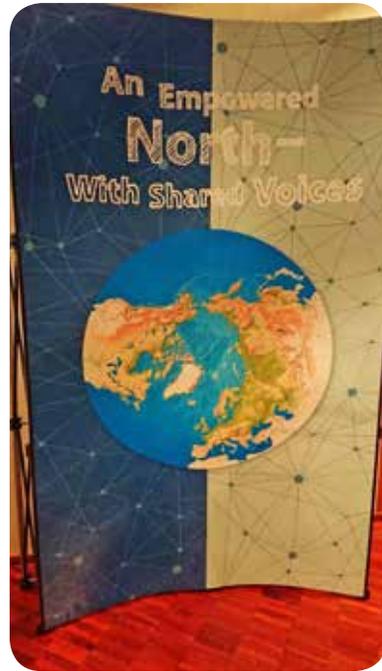
その思いを自分なりに昇華させていく上で、スチュアートヘンリの編著書（1996）は、有効な参照点になるかもしれない。スチュアートは、北極圏先住民族による生業諸活動を跡付けるなかで、研究者としての誠実な「告白」を行っているからである。

ネツリック・イヌイット[※]の文化・社会が変貌しつつも独自の伝統を継承しているという論調をふまえて、生業活動は極北での生存のために欠かせない側面を強調する論文を書いているうちに、私自身がその言説を無批判に取り入れているのではないかという疑念が生じてきた。（中略）。調査中に、乱獲や獲物の放棄などの、採集狩猟民の理想像とはかけはなれたさまざまな現象を見聞した。（これまで）私はそうした現象をどう解釈するかについて悩んだが、それは例外であるとか、逸脱した行為であると解釈して、書いている論旨に組みこむことはなかった。（中略）私が見聞したものを無視して、「あるべき」採集狩猟民の姿を描き続けてきた（スチュアート1996: 131）。

※「ネツリック・イヌイット」とは、スチュアートの主たる研究対象である、カナダ・クガールク（旧ペリーベイ）村に住む先住民族である。

スチュアートによる叙述は、既に四半世紀のタイムラグをもつが、フィールドワークで得られた知見と、UArcticのような国際会議の場で発せられる先住民かくあるべしといった言説のようなものとの間で、それをどう咀嚼し、文字化していくかという研究者としての微妙なバランスを考える際に、今なお有効な視点を内包しているように思う。スチュアートは、この告白の先に「採集狩猟を営むイヌイットは現在も自然との調和をはかっているか」、「生業は生命を維持する活動か、レクリエーションか」、「生業活動は政治的レトリックか」などいくつかの基礎的な項目を設定し、自身の「告白」を自らによって再検証し、先住民に対する静的で固定的なイメージと、実際に自らによって見聞した「例外的」な「真実」との係わりを丹念に検討し直している。そこでは、社会心理学でしばしば用いられる「自己呈示」という概念を援用しながら、現代の先住民の生業活動の意義を捉え直している。

スチュアートの検討作業から得られたエッセンスだけを取り出して、私がUArcticで感じた違和感のようなものを、もう少しだけ言語化してみると、便宜的に以下のようなことが言えるかもしれない。すなわち、UArcticに参加して自身の発表を行い、さまざまな議論を聴くなかで私が（改めて）感じることとなったのは、在来知や儀礼などの不在如何にかかわらず、先住民にとってそれが国家（などのマジョリティ社会）に対するアイデンティティやエスニシティの呈示（自己呈示）としての機能を持ち得る限り、在来知などの視座は先住民を表象する役割を果たし続ける、ということである。言い方を換えれば、先住民（社会）を国家などとの対比の中に位置付け、在来知を科学との関係性の中に対置することによってうかがい知ることのできる世界は、国家による先住民（社会）の諸活動の変容を説明し得ると同時に、こうした過程の中で先住民自らも、国家の側が持ち込む価値観やモノなどを自身の尺度で捉え直し、自己呈示を行うことによって、非対称な権力関係に対抗してきたということである。在来の諸活動が、他者との係わりのなかで揺れ動き、一層意識化され、次第にそれを自らが持つ「特色」として認識していく過程は、国家の先住民に対する一方的な介入だけでなく、先住民の国家への戦略的関与をも包摂した動きとして理解する必要があるということである。



UArcticの標語

UArcticのビジョンには、「共通の声で、力ある北極に（An empowered north - with shared voices）」という標語が掲げられている。UArcticが力点を置く諸価値には、「包含（Inclusive）」や「互恵（Reciprocal）」がある。先住民と国家という二分法に規定されない「共通の声」の諸相を、UArcticのような世界大の北極研究コンソーシアムへの参加を通して、引き続き、自分なりの言葉で考えていきたいと思う。

- * スチュアートヘンリ編著『採集狩猟民の現在：生業文化の変容と再生』言叢社、1996年。
- * 的場澄人・山崎哲秀「2016年12月にグリーンランド北西部カナック村で生じた海氷流出事故と漁業被害：グリーンランド北西部における社会・自然環境と生業の変化」、『北海道の雪氷』第37号、2018年。

学 界 短 信

◆ 学会カレンダー ◆

- 2018年12月6-9日 50th Annual ASEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Convention 於ボストン <http://www.aseees.org/convention>
12月13-14日 2018年度スラブ・ユーラシア研究センター冬期国際シンポジウム「帝国・ブロック・連邦にそびえる言語 1918-2018」
2019年3月23-24日 2018年度日本中央アジア学会年次大会 於KKR江ノ島ニュー向洋
<http://www.jacas.jp>
4月12-14日 BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) 2019 Annual Conference 於ケンブリッジ大学 <http://basees.org/conferences/>
5月2-4日 24th Annual ASN (Association for the Study of Nationalities) World Convention 於コロンビア大学ハリマン研究所
<http://nationalities.org/conventions/world/2019/>
6月29-30日 第10回スラブ・ユーラシア研究東アジア大会 於東京大学
2020年8月4-9日 ICCEES第10回大会 於モントリオール <http://iccees.org/>

[編集部]

大学院だより

◆ 博士後期課程の生熊源一さんが日本ロシア文学会賞を受賞 ◆



授賞式の様子

北大院文学研究科博士後期課程の生熊源一さん（歴史地域文化学専攻・スラブ社会文化論専修）が、2018年度の日本ロシア文学会賞（論文の部）を受賞しました。受賞対象となったのは、『ロシア語ロシア文学研究』第49号（2017年、1～27頁）に掲載された論文「息の転換：『集団行為』における対物関係」です。1970年代に始まるソ連非公式芸術の潮流のひとつモスクワ・コンセプチュアリズムのグループである「集団行為」が表現しようとした人間とモノとの関係を、人間によるモノへの「息の吹込み」や「呼吸」という視点から捉え直そうとした生熊さんの論文は、「集団行為」およびコンセプチュアリズムの研究に新たな一石を投ずる大変優れた論文であると評価されました。生熊さんは今回の受賞をこれから研究を続けるうえで大きな支えになるものと喜びつつ、この経験を活かし、より一層精進することを決意しておられます。今後のご研究の益々の発展が期待されます。[安達]

北大院文学研究科博士後期課程の生熊源一さん（歴史地域文化学専攻・スラブ社会文化論専修）が、2018年度の日本ロシア文学会賞（論文の部）を受賞しました。受賞対象となったのは、『ロシア語ロシア文学研究』第49号（2017年、1～27頁）に掲載された論文「息の転換：『集団行為』における対物関係」です。1970年代に始まるソ連非公式芸術の潮流のひとつモスクワ・コンセプチュアリズムのグループである「集団行為」が表現しようとした人間とモノとの関係を、人間によるモノへの「息の吹込み」や「呼吸」という視点から捉え直そうとした生熊さんの論文は、「集団行為」およびコンセプチュアリズムの研究に新たな一石を投ずる大変優れた論文であると評価されました。生熊さんは今回の受賞をこれから研究を続けるうえで大きな支えになるものと喜びつつ、この経験を活かし、より一層精進することを決意しておられます。今後のご研究の益々の発展が期待されます。[安達]

編集室だより

◆ スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 12 ◆

Migration, Refugees and the Environment from Security Perspectives の刊行

2018年8月にスラブ・ユーラシア研究報告集12 *Migration, Refugees and the Environment from Security Perspectives* (Edited by Akihiro Iwashita, Jusen Asuka and Jonathan Bull) が刊行されました。今号は、2017年10月に東北大学東北アジア研究センターで開催された、人間文化研究機構基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究」の北大拠点 (NoA-SRC) と東北大拠点の共催による国際シンポジウムの報告集として編集されました。北大拠点が組織した Session A は「北東アジアにおける移民と難民」、東北大拠点が組織した Session B は「移民、難民と環境問題」をテーマとしております。詳細は下記の通りです。PDF は下記のウェブサイトから入手可能です。[加藤]

http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicn/slavic_eurasia_papers/no12/

会議 (2018年8～9月)

◆ センター協議員会 ◆

2018年度第3回 8月28日(火)

議題 1. 教員の人事について

2018年度第4回 9月12日(水)

議題 1. 教員の人事について

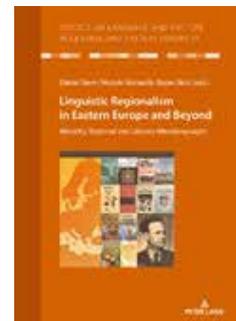
[事務係]

みせらねあ

◆ *Linguistic Regionalism in Eastern Europe* の刊行 ◆

2018年10月に、Peter Lang社から標記の *Linguistic Regionalism in Eastern Europe and Beyond: Minority, Regional and Microliterary Languages* が刊行されました。本研究論集は2015年1月に開催されたゲント大学スラブ・東欧研究センターとの共催で組織された国際シンポジウム *Slavic Minorities and Their (Literary) Languages in the European Context and Beyond: The Current Situation and Critical Challenges* での研究報告を論文化したものが中心になりますが、その他に西ヨーロッパの事例を分析する論文も数件加えました。

今日のヨーロッパにおける言語権や言語地域主義、文章語の発生と発達の諸問題、インターネットの役割などを、様々な理論に基づいて



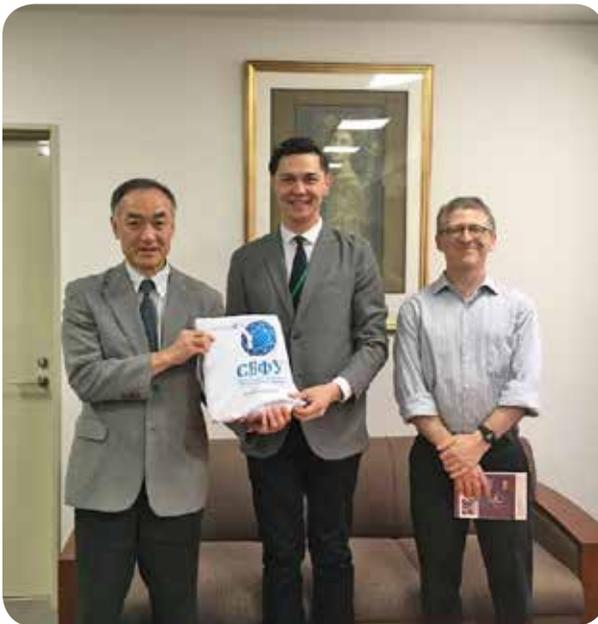
分析しています。さらに、いわゆる言語活動家2名の報告文も含み、当該問題に関する研究者と実務者といった、異なる立場の参加者による多角的な視点も提供している点も注目されます。

編集者は Dieter Stern 教授 (ゲント大学)、野町素己 (センター) および Bojan Belić 講師 (ワシントン大学) です。Belić 氏はシンポジウムの翌年 2016 年に外国人特任教員としてセンターに2ヵ月滞在し、その際に筆者とともに本論文集の編集作業に取り組みました。編集委員と各著者との度重なる意見の衝突に加え、出版社や印刷所の事情から、刊行までに予想以上の時間がかかりましたが、まずは刊行出来て編者の一人としてほっとしています。

本著作に関する詳細は次のリンクをご覧ください。[野町]

<https://www.peterlang.com/view/title/67572>

◆ 北東連邦大学副学長の表敬訪問 ◆



8月29日にロシア北東連邦大学副学長のクグヌロフ氏 (Vladlen Kugunurov) がセンターを表敬訪問されました。同副学長は、「極東・北極圏の持続可能な環境・文化・開発を牽引する専門家育成プログラム (East Russia-Japan Expert Education Program、通称 RJE3 プログラム)」の国際運営委員会に出席するために北大を訪れていました。当日は、センター長が出張で不在だったため、センターで RJE3 プログラムに関わっている副センター長の田畑とウルフ氏が対応しました。この表敬訪問は、RJE3 プログラムを通じて北東連邦大学の院生が半年間センターに滞在したり、北極域研究のプロジェクトに

より研究員の相互訪問が増えたりするなど、センターと同大学との関係が近年密接になっていることから、クグヌロフ氏の希望により実現したものです。面談では、今後の交流を経済以外の領域にも拡大することや、互いの便宜供与を増やすことなど、交流の深化についていろいろなアイデアが出されました。[田畑]

◆ 人物往来 ◆

ニュース 154 号以降のセンター訪問者 (客員、道央圏を除く) は以下の通りです (敬称略)。
[仙石/大須賀]

8月29日 Vladlen Kugunurov (北東連邦大学、ロシア)

8月30日 Victor Larin (極東諸民族歴史・考古・民族学研究所、ロシア)

9月2日 河本和子 (中央大)

9月3日 澤直哉 (早稲田大・院)

9月25日 Bakhtiyor Islamov (プレハーノフ記念ロシア経済大、ウズベキスタン)

- 10月1日 Charles Che-Jen Wang (台湾)
10月9日 Maria Shagina (日本学術振興会特別研究員PD/立命館大学)
10月13日 村田真一(上智大) 村田ゼミの皆さん:有重満里奈、蒲谷勇人、河野航貴、柴十紀子、鶴見百英、
新田雄士、細谷日乃花、明珍奨真、安田有希
10月15日 長島徹 (在ロシア日本大使館)
10月17日 須川忠輝 (大阪大・院)
10月18日 Marc. L. Greenberg (カンザス大、米国)
10月29日 Erdenebat Bataa (モンゴル国立大)、Soyolmaa Batbekh (同)、Tamara Litvinenko (地理研
究所、ロシア/同志社大)、雲和広 (一橋大)

◆ 研究員消息 ◆

田畑伸一郎研究員は2018年8月13～26日の間、欧州ヘルシンキオフィス運營業務のため、フィンランドに出張。9月1～7日の間、“UArctic Congress 2018”出席・研究報告・意見交換及び研究打合せのため、フィンランドに出張。9月7～16日の間、欧州ヘルシンキオフィス運營業務のため、フィンランドに出張。10月8～12日の間、大学交流デー実施業務のため、ロシアに出張。10月12～18日の間、ロシアの経済発展に関わる聞き取り調査及び資料収集のため、ロシアに出張。

ウルフ・ディビッド研究員は7月17日～8月26日の間、「ソ連・東欧におけるホロコーストの比較研究」関連資料収集、及び「中露関係の新展開:『友好』レジーム形成の総合的研究」関連資料収集のため、米国に出張。

岩下明裕研究員は8月26日～9月3日の間、中国とロシアの国境地域の交流と観光についての解説・意見交換・現地調査、及び研究打合せのため、中国、ロシアに出張。

野町素己研究員は8月18日～9月4日の間、国際スラヴィスト会議参加・研究報告、資料収集及び研究打合せのため、セルビア、ボスニア、クロアチアに出張。9月26日～10月1日の間、研究打ち合わせ、及びスラブ言語学会で研究報告のため、米国に出張。10月8～11日の間、北海道大学交流デー(モスクワ大学)研究交流セミナー出席・研究報告・意見交換及び研究打ち合わせのため、ロシアに出張。

仙石学研究員は8月23日～9月4日の間、資料収集、研究打合せ、及び国際学会“ESPANET 2018 Conference”参加および研究報告のため、ポーランド、リトアニアに出張。

長縄宣博研究員は10月3～11日の間、研究打合せ、国際会議“Religious (In) Tolerance in the Russian Empire”出席及び報告、資料収集(ロシア)、及び北海道大学交流デー(モスクワ大学)研究交流セミナー出席・研究報告・意見交換のため、カザフスタン、ロシアに出張。

宇山智彦研究員は9月29日～10月6日の間、外務省・講師派遣事業による講演のため、トルクメニスタン、カザフスタン、ウズベキスタンに出張。

安達大輔研究員は8月27日～9月3日の間、資料調査のため、ロシアに出張。9月12～15日の間、国際フォーラム「移民学とスラヴ研究」参加及び研究報告のため、中国に出張。9月27～30日の間、「第9回 東アジアにおけるヨーロッパ諸言語シンポジウム」出席及び研究報告のため、台湾に出張。10月9～12日の間、北海道大学交流デー(モスクワ大学)研究交流セミナー出席・研究報告・意見交換のため、ロシアに出張。

鬼内勇津流研究員は8月23日～9月4日の間、“IFLA World Library and Information Congress 2018”出席、及び“IFLA Satellite Meeting”出席のため、マレーシアに出張。

[事務係]

目 次

研究の最前線.....	1
2018 年度冬期国際シンポジウム《帝国・ブロック・連邦にそびえる言語 1918-2018》開催予告／高橋沙奈美助教が地域研究コンソーシアム賞登竜賞を 受賞／人間文化研究機構基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「北東アジ ア地域研究」主催国際シンポジウム「北東アジアにおける地域構造の変容：越 境から考察する共生への道」／2018 年度特任教員（外国人）決定・着任／ Charles Che-Jen Wang（汪哲仁）氏の滞在／研究会活動	
人事の動き.....	6
助教の就任／学術研究員紹介／事務職員	
映画にみる人間の輪郭	
by 後藤正憲.....	7
UArctic Congress 2018 に参加して	
by 高橋美野梨.....	10
学界短信.....	14
学会カレンダー	
大学院だより.....	14
博士後期課程の生熊源一さんが日本ロシア文学会賞を受賞	
編集室だより.....	15
スラブ・ユーラシア研究報告集 No. 12 <i>Migration, Refugees and the Environment from Security Perspectives</i> の刊行	
会議（2018 年 8 ～ 9 月）.....	15
センター協議員会	
みせらねあ.....	15
<i>Linguistic Regionalism in Eastern Europe</i> の刊行／北東連邦大学副学長の表敬訪問 ／人物往来／研究員消息	

2018 年 11 月 26 日発行

編集	大須賀みか
編集協力	宇山智彦
発行者	仙石 学
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北 9 条西 7 丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
